



Higashi Sapporo
Hospital's
Newsletter MADO

January 2026 No.123



Higashi Sapporo Hospital
医療法人
東札幌病院

2026年1月発行
発行責任者／病院長 日下部俊朗
札幌市白石区東札幌3条3丁目7-35
TEL.011-812-2311 (代表)
FAX.011-823-9552
E-mail : info@hsh.or.jp
HP : <https://www.hsh.or.jp>



医療法人東札幌病院 理事長

石谷 邦彦

新 | 年 | の | ご | 挨拶

第5回がん緩和ケアに関する国際会議(5th Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer; SCPSC)まで、いよいよ半年となりました。現在、すでに多数の参加登録ならびに一般演題のご応募を頂戴しており、深く感謝申し上げます。本会議は、American Society of Clinical Oncology(ASCO)やEuropean Association for Palliative Care(EAPC)をはじめ、数多くの権威ある学術団体のイベントカレンダーに掲載されており、誠に光栄に存じます。おかげさまで、5th SCPSC実行委員会における準備も順調に進んでおります。皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

ここ数年、私はイマヌエル・カントの「人間の尊厳」概念について微力ながら思索を重ねてきました。恒例の東札幌病院のキーワード2026には、その核心ともいえる“自分の幸せは、他者の幸せあってこそ成り立つ”という意味を込めています。

2026年の思想のキーワード
**Happiness is not isolated.
Another's happiness is my happiness.**
— 幸せは孤立しない。誰かの幸せは私の幸せ —

「人間の尊厳」概念はがん緩和ケアにおける 近未来のエピステームとなり得るか？

— 第5章「人間の尊厳 (Human Dignity)」概念の倫理的視座 —

ミシェル・フーコー(1926-1984)の「知の考古学」におけるエピステーム(episteme)とは、特定の歴史的時代における知識の基盤的構造、すなわち「何が知識として認識されるのか、何が真実とされるのか」を決定する深層的枠組みと定義した。そして、フーコーはエピステームを、時代ごとに根本的に異なるものとして提示している。例えば、ルネサンス期の「相似性に基づくエピステーム」から、古典主義の「秩序と表象のエピステーム」を経て、近代の「人間という対象の発見」へと移行するように、知識の根本的構造は歴史的に変転すると思察している¹⁾。本稿でいう「医療エピステーム」という表現は、フーコーの用語を厳密に踏襲するというより、医療実践を方向づける支配的な認識の枠組みであり一定の比喩的拡張を含んでいる。

要旨

「人間の尊厳」概念は、その歴史的展開において多様な解釈を経てきた。本稿は、①尊厳概念の歴史的系譜とカント哲学において人間尊厳の根拠とされた自律性の再検討、②医療実践における代表的な具現化の試みとしてのDignity TherapyおよびEpistemic Justiceなどの検証、③新たな医療エピステームとしての尊厳概念の再構築、の3点から、がん緩和ケアの倫理的基盤の再定位を目的とする。

キーワード：人間の尊厳、自律性(autonomy)、Dignity Therapy、Epistemic Justice、エピステーム、緩和ケア

序

Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer(SCPSC)ではこれまで、安楽死問題を医学・医療の本質を問う中核的テーマとして継続的に議論を積み重ねてきた²⁾。1990年代以降「Quality of Life(QOL)」概念が医学・医療領域における主要なエピステームとして大きな影響力を有してきた。しかし、安楽死問題をめぐる論点においてはQOL概念のみでは倫理的判断の根拠として十分に対応し得ない状況が顕在化している³⁾⁴⁾⁵⁾。こうした状況の中で、カナダの精神科医ハーヴェイ・チョチノフ(Harvey Chochinov)らがカントの「人間の尊厳」概念を緩和ケアの中心的思想として提示したことは、医療倫理に新たな潮流をもたらした⁶⁾。以来「人間の尊厳」概念は、QOLに

変わり得る近未来の医療エピステームとして理論的成熟が期待されている。本稿ではそれらの議論の基盤整備のため尊厳概念の歴史的・哲学的背景を概観するとともに、その臨床応用としてのDignity Therapy⁷⁾やEpistemic Justice⁸⁾⁹⁾などが果たし得る役割と限界を検討する。その上で、がん緩和ケアにおける「人間の尊厳」概念の可能性と今後の方向性を思考する。紙幅の制約に鑑み、本論は全3回にわたり構成する。その第1回の本稿では近未来の医療エピステームとしての可能性をもつ尊厳概念の基礎的検討を試みる。

1 尊厳概念の歴史的系譜とカントの基盤

1.1 尊厳概念の多様性と歴史の変遷

「尊厳(dignity)」という語は、同じ言葉でありながら、時代、地域、思想的背景によって異なる意味を帯びてきた。古代ローマにおけるdignitasは、社会的身分・公的名誉と結びついた階層的な概念であり、今日の倫理的尊厳とは大きく異なる。中世ではキリスト教思想背景の下で、人間は「神の像として造られた人間(imago Dei)」という神学的な意味での聖性が尊厳の基盤とされた。近代に入ると、デカルト以降の理性主義および啓蒙思想の影響から、人間の理性こそが尊厳の根拠であるという考え方が主流となった。しかし、現代の生命倫理における尊厳概念は、さらに多元化している。

- ・ 内在的価値としての尊厳(ドイツ的理解)：すべての人間が、その存在そのものにおいて無条件の価値を有するという立場。とりわけ基本法(Grundgesetz)に象徴されるような人格の不可侵性を強調する。
- ・ 相対的・文化的価値としての尊厳(アメリカ的理解)：個人の自由な選択とその実現を尊厳の本質とする立場。いわゆるパーソナル・オートノミーを強調する。
- ・ 関係的・社会的価値としての尊厳(ヨーロッパ大陸的理解)：人間関係・社会的承認の中で尊厳が成立するという立場で、現象学・政治哲学と共鳴する。

これらは厳密な分類ではなく、尊厳概念の理解の傾向を示すものである。この多様性は、現代の尊厳言説が単一の合意された基礎づけを欠いているが故である。しかし同時

に、この多様性の根底の多くには統一するカント的洞察が存在している。

1.2 カントの「人間の尊厳」概念の核心

イマヌエル・カント(1724-1804)の「道徳形而上学の基礎づけ」(1785)における人間の尊厳論は、近代的尊厳概念の源流であり、今日なお最も哲学的に堅牢な理論の根拠である¹⁰⁾¹¹⁾。

カントにおいて、自律性(autonomy)が人間の尊厳の根拠とされた。自律とは、自分で自分に道徳法則を与える能力であり、他者や欲望によって規定されない自由意志を意味する。カントの著名な言葉は次のとおりである。

「ただ人間性のみが無条件で比較のできない価値を有する。なぜなら人間のみが自律の主体であり、道徳法則を自らに与えることができるから」

ここで極めて重要なのは、自律性は単なる個人的自由ではなく、道徳法則への服従を意味するという点である。

カントの第二定式は次のようにいう：「汝の行為の格律が常に同時に普遍的法則の原理であるがごとく行為せよ」。そして第三定式は：「汝の人格ならびに汝の人格の中にある人間性を、常に目的としてのみ使用すべきであり、決して単なる手段として使用してはならない」。

つまり、自分自身に対する道徳的義務と、他者に対する道徳的義務は相即不離なのである。自律的な人間は、自分の行動を普遍的道徳法則に従わせると同時に、他者をも同じく自律的な主体として尊重する義務を負う¹²⁾。

ここから導き出されるのは、尊厳は、人間性に内在する価値

であると同時に、その価値を相互に承認し合う関係性の中で具体的に現れる、という根本的洞察である。

1.3 カント的尊厳概念の現代的妥当性

カント的基盤の上に立つ尊厳概念は、現代においても以下の理由から妥当性を失っていない。

第一に、普遍性と多元性の両立である。カント的尊厳は、すべての人間に無条件に属するもの(普遍性)でありながら、その実現形態は文化的、関係的文脈に依存している(多元性)。これは、グローバル化した世界の中で異なる価値観を持つ人々が共存するための理論的基盤を提供する。

第二に、道徳的責任性の根拠づけである。尊厳が権利としてのみ理解されるなら、人間は際限なく権利を要求することになる。しかしカント的には、尊厳は同時に義務であり、他者の尊厳を尊重する責任(守る義務)を伴う。この非対称性こそが、倫理的実践を可能にする。

第三に、死を含む人間の全生涯の尊厳である。厳密なテクスト解釈としては議論の余地があるが、本稿では「種としての人間」「潜在的理性的存在」などの観点から、生産性や意識の有無に依存しない、胎児、重度認知症患者、そして死者をも、カント的枠組みを拡張して尊厳の主体として考察する。これは、功利主義的な生命倫理観に抗する強固な哲学的立場を提供する¹³⁾¹⁴⁾。第2回の記述では、カント的尊厳概念が臨床現場においていかに実装され得るかを、Dignity TherapyおよびEpistemic Justiceなどの観点から検討し、その可能性と課題を明らかにする。

(次号に続く)

参考文献

1. Foucault M. *L'Archeologie du savoir*. 1969 (『知の考古学』中村雄二郎訳、河出書房新社、1974)
2. Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer.
<http://www.sapporconference.com/en/index.html> DOI: 10.1017/S1478951523000743
3. Randall F. Quality of Life-The philosophy of Palliative Care: Critique and Reconstruction. 2006, p 25-52. OXFORD ACADEMIC
<https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780198567363.003.0002>
4. DiBaise JK. Euthanasia and quality of life: Critique of a subjective standard.
The National Catholic Bioethics Quarterly. 2017. 17(3), p417-424 <https://doi.org/10.5840/ncbq201717343>
5. Malhotra C. An umbrella review of patient- and carer-reported measures for assessing adult end-of-life care quality outcomes. *eClinical Medicine The Lancet Discovery Science*. 2025. 89, 103516. DOI:10.1016/j.eclinm.2025.103516
6. Chochinov HM et al. Dignity therapy: a novel psychotherapeutic intervention for patients near the end of life. *J Clin Oncol*. 2005;23(24) 5520-5525. DOI: 10.1200/JCO.2005.08.391.
7. Chochinov HM. *Dignity in Care: The Human Side of Medicine*. Oxford University Press. 2024. DOI: 10.1093/med/9780199380428.001.0001
8. Fricker M. *Epistemic Injustice: Power and the Ethics of Knowing*. Oxford University Press. 2007. DOI: 10.1093/acprof:oso/9780198237907.001.0001
9. Grim K. & Ramon S. Working towards successfully centering dignity and epistemic justice in mental health practice. *Academia Mental Health and Well-Being*. 2025; 2 (4) doi.org/10.20935/MHealthWellB7930
10. Kant I. *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*. 1785. In: M. Gregor(trans), *Practical Philosophy*, Cambridge University Press, 1996(『道徳形而上学の基礎づけ』御子柴善之訳、人文書院、2022)
11. Kant I. *Kritik der praktischen Vernunft*. 1788. (『実践理性批判』波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳、岩波文庫、1979)
12. Hill TE. *Dignity and Practical Reason in Kant's Moral Theory*. Cornell University Press. 1992. DOI:10.7591/9781501735035
13. O'Neill O. *Constructing Authorities: Reason, Politics and Interpretation in Kant's Philosophy*. Cambridge University Press. 2015. DOI:10.1017/CBO9781316337141
14. Ishitani K. 第4章「人間の尊厳」をめぐる円環構造. *IRS-SCPSC Newsletter 冬号 2025* <https://irs-scpssc.com/newsletter-winter2025/>

第63回日本癌治療学会学術集会に参加して

内科部長・医局長 伊藤 智子

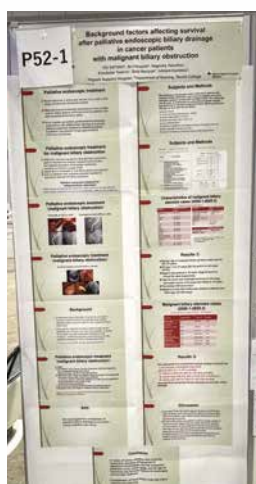
この度、第63回日本癌治療学会学術集会(2025年10月16日～18日・横浜)にてポスター発表を行いました。演題は「胆道狭窄を有する癌患者に対する緩和的内視鏡減黄処置後の生存期間に影響する背景因子」です。

本演題を癌治療学会へ提出した理由は、私自身が消化器内視鏡医、腫瘍内科医、そして緩和ケア医として臨床を行っていることにあります。2025年春に東札幌地域緩和ケアセミナーにて、当院での緩和的内視鏡治療について発表した内容を、より多くの医療者に共有したいと考え、本学会への演題応募に至りました。

今回の研究は、当院の悪性胆道狭窄を有するがん患者に対して緩和的内視鏡減黄処置を行った症例を対象とした後ろ向き研究です。解析の結果、生命予後に影響を及ぼす背景因子として、重大な併存疾患の有無、PaP予後予測スコア、病期、癌腫が重要である可能性が示唆されました。これらの因子を踏まえることで、減黄処置後のACP(アドバンス・ケア・プランニング)において、患者さんやご家族とより適切な意思決定支援ができると感じました。

発表は緩和領域のセッションで行われ、多職種による多様な発表があり、地域性や各施設の特徴を生かした取り組みが紹介されていました。また、個人的に注目していたのはAI技術に関する演題で、診断・治療支援だけでなく、生成AIによる学会演題作成や論文査読支援にまで応用が進んでいる点が印象的でした。生成AIは万能ではありませんが、限られた時間で臨床・研究を両立していく上で、有効に活用できるツールであると再認識しました。

最後に、今回の発表にあたりご支援いただいた石谷理事長、日下部院長をはじめ、スタッフの皆さまに心より感謝申し上げます。

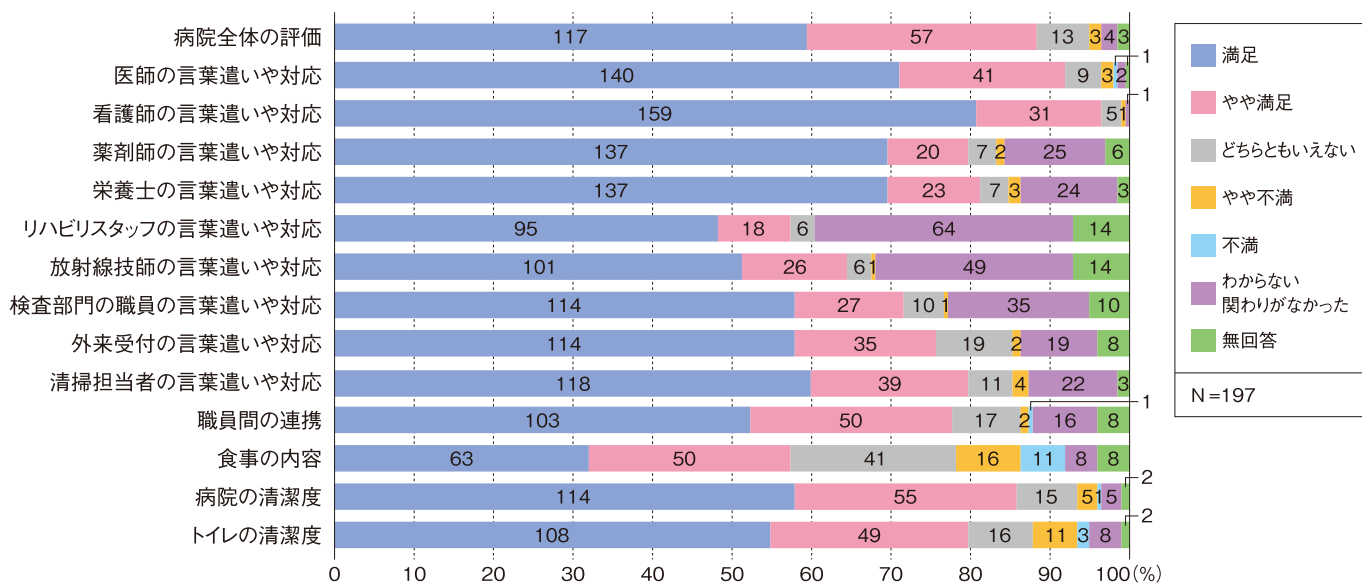




入院患者満足度調査 2025年9月実施

患者満足度調査は、患者さん・ご家族が満足する医療を受けることができるかどうかを把握するとともに、どのようなご希望をお持ちなのかを把握するために1年に1回実施しています。今回は、2025年9月1日～10月15日に行い、197名の方にご回答・ご意見をいただきました。

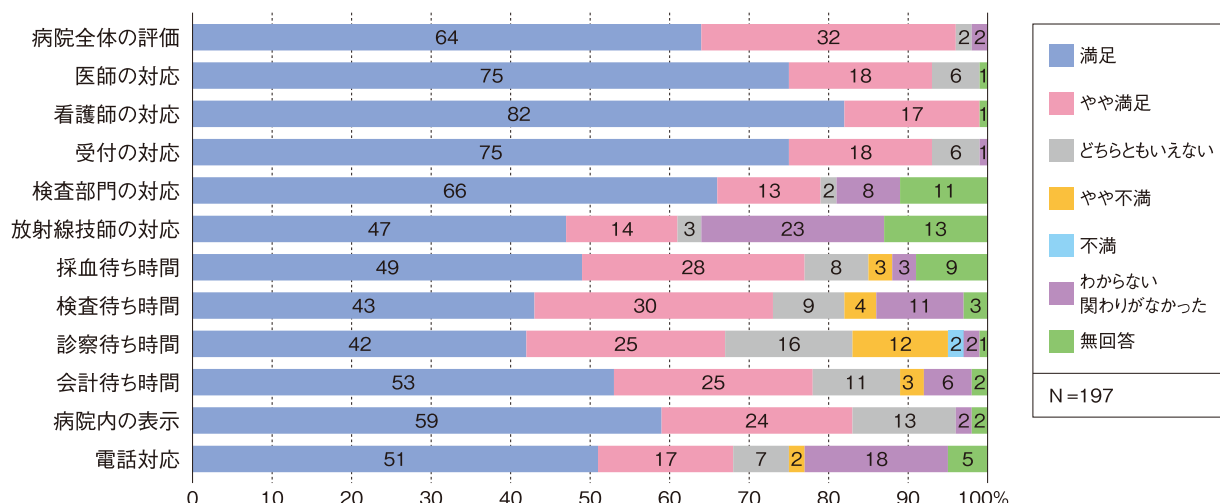
病院全体の評価は、「満足・やや満足」が88.3%と多くの方にご満足いただけていました。医師や看護師の言葉遣いや対応では、「満足・やや満足」がどちらも90%以上と高い評価をいただいております。食事の内容については、「満足・やや満足」が57.4%と低めであり課題となっております。また、職員の対応や食事の内容、療養環境に対しては個別のご意見も多数いただきました。この評価を真摯に受け止め、職員の接遇や食事の内容、療養環境の改善にさらに力をいれていきたいと思います。ご協力ありがとうございました。（文責：患者サービス向上委員会 看護部副部長 青田美穂）



外来患者満足度調査 2025年9月実施

外来満足度調査は2025年9月1日～9月5日に待ち時間調査と同時に行いました。外来受診、化学療法を受けている患者さん延べ100名にご回答いただきました。

病院全体の評価は「やや満足」以上が96%と前年度より高い評価をいただきました。受付、医師、看護師の対応も前年同様「やや満足」以上で90%以上の評価をいただきました。『検査』『診察』『会計』の待ち時間は前年度より全体的に高い評価をいただきましたが『診察』の「やや不満」がわずかに増えています。ご負担をおかけしている点を真摯に受け止め、Web問診の一部導入や待ち時間の発生が予測される場合は、比較的空いている日にご案内するなどできる限り調整させていただきます。また、どれくらいの待ち時間となるか分かりやすくお伝えできるようお声を徹底していきます。季節柄、新型コロナウイルス、インフルエンザが流行中のため、患者さん、ご家族が安心して受診・付き添いできるよう引き続き感染管理の徹底に努めていきます。ご意見の中には、たくさんの励みになるお言葉をいただきました。ひとりひとりの患者さんのご意見を大切に、患者さんの満足につながるよう、より良い外来運営を目指していきたいと思います。ご協力ありがとうございました。（文責：患者サービス向上委員会 外来看護課長 鈴木京子）





令和7年度 OB会開催のご報告

事務部 部長 大石 忠臣

このたび、札幌パークホテルにおいて、当院関係者によるOB会を開催いたしました。当日は、OB6名、現職員21名が出席し、盛会のうちに執り行うことができました。まず開催した総会において、本年3月まで当院に在職されていた多田正人様が副会長に就任され、今後は長年の経験と知見を生かし、本会の運営に対し助言をいただくこととなりました。新体制のもと、当院とOBの皆様との連携強化が一層図られることが期待されます。

懇親会の冒頭では、会長である秋山先生よりご挨拶を頂戴し、当院の歩みを振り返りながら、本会の意義と継続の重要性についてお話しいただきました。

続いて、日下部院長より当院の近況について詳細な報告があり、来年開催予定の「がん緩和ケアに関する国際研究会議」に関するプログラム構成ならびに主旨について説明が行われました。当院が国内外の医療者との協働を進め、緩和ケア領域における知の発信拠点を担うべく準備を進めている現状が共有され、参加者からも高い関心が寄せられました。

OBの皆様より順次ご挨拶を賜りました。長年にわたり当院の発展に寄与された皆様の言葉には重みがあり、「医療者一人ひとりが当事者意識をもち、現場を大切に、多職種が協働して患者と向き合う」という、当院が大切にしてきた理念が改めて示されました。

現職員にとって、こうした歴史と価値観に直接触れる機会は非常に意義深いものであり、当院における医療の質と組織文化が、過去から現在へ、そして未来へと連続していることを再認識する機会となりました。

お話を聞くにつれ思い出したことがあります。先般受審した「病院機能評価」において、患者・家族との面談時には医師と看護師、必要に応じて多職種が必ず同席する当院の取り組みに対し、サーベイヤーより「極めて稀有であり、大変素晴らしい」との高い評価を受けたことです。この姿勢こそ、OBの皆様が礎を築いてこられた当院の伝統の一端であるといえます。

閉会にあたり、佐藤副理事長よりご挨拶があり、東札幌病院が長年培ってきた伝統と理念を、現職員がいかに継承し、さらに発展させていくべきかについて述べられました。医療の現場が変化を続けるなか、患者・家族に寄り添う姿勢を堅持していくことの重要性が再認識されたと思います。

なお、本会の名称については、これまでの「OB会」から改め、当院の歴史を「つないでいく」という趣旨をより明確に表す名称への変更を検討しております。多田副会長と事務局にて協議を進めており、名称が正式に決定次第、改めて皆様にご報告申し上げます。



MRI装置更新のお知らせ

放射線課 今野 拓二

今春、MRI装置を更新することとなりました。新規に導入される装置は富士フイルムメディカル株式会社製ECHELON Smart ZeroHeliumとなります。製品名にもありますように、液体ヘリウムを使用せずに稼働させることができる装置です。入れ替えのための工期は2026年4月から1～2カ月間を予定しています。

検査依頼を頂いている外部医療機関様にはご迷惑をおかけしますが、検査業務を再開した際には従来どおりのご利用をお願い申し上げます。

第5回がん緩和ケアに関する国際会議：

5th Sapporo Conference for Palliative and Supportive Care in Cancer (SCPSC)のプログラム

事前
参加登録

Webサイトにて
受付中

一般演題
募集

Webサイトにて受付中
2025年
12月26日 正午(12:00)まで

2026. **7.10** Fri.

シンポジウム1
08:00-12:00

がん疼痛に対するオピオイド：新たな科学とベストプラクティス

座 長： **David Hui** (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)
Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

パネル 1

序論：オピオイド応答の新たな科学

David Hui (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)
Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

オピオイド応答のゲノム-ワイド関連解析：がん疼痛管理への意義
西澤 大輔 (東京都医学総合研究所)

がん疼痛に対するオピオイド療法：薬理遺伝学的解析のインパクト
D.Max Smith (Georgetown University, USA)

がん疼痛における神経炎症：
オピオイド療法における腫瘍微小環境の役割

Angela Santoni (Sapienza University of Rome, Italy)
Edoardo Arcuri (Regina Elena Cancer Institute of Rome, Italy)

パネル 2

序論：がん疼痛に対するオピオイド使用の臨床アップデート

David Hui (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)
Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

がん疼痛治療におけるブプレノルフィンとメサドン

Russell Portenoy (Albert Einstein College of Medicine, USA)

オピオイドが免疫応答と内分泌機能に与える影響

Jason Boland (Hull York Medical School, UK)

オピオイドの(脳科学的な)強化(Reinforcement)／
報酬(Reward)に与える影響：乱用のリスクとその緩和戦略

Joseph A. Arthur (University of Texas MD Anderson Cancer Center, USA)

ランチョンセミナー1
12:00-13:00

医療、ナチズム、及びホロコーストに関するランセット委員会：
歴史的エビデンス、今日における意義、明日への教訓

Herwig Czech (Medical University of Vienna, Austria)
座長：Declan Walsh (Levine Cancer Institute, USA)

シンポジウム2
13:00-17:00

がん患者への個別化された緩和ケアとサポーター・ケアの時代： 進歩と革新

座長： **Areej El-Jawahri** (Massachusetts General Hospital, USA)

中川 俊一 (Columbia University, USA)

※本セッションでは、終末期における化学療法、放射線治療、免疫療法、標的療法、緩和手術などの緩和治療の妥当性について議論する

進行がん患者に対する緩和ケアの役割

Jennifer Temel (Massachusetts General Hospital, USA)

血液悪性腫瘍患者に対する緩和ケア：現在の動向と将来の方向性

Areej El-Jawahri (Massachusetts General Hospital, USA)

新規治療法と個別化医療の時代における緩和ケア

Jessica Bauman (Fox Chase Cancer Center, USA)

ギャップを埋める：外科の質向上のための緩和ケアの活用

Ana Berlin (Columbia University, USA)

イブニングセミナー
17:00-18:00

未来のケアプランニング - 緩和ケア患者のためのより良いプランニングに関するヨーロッパの視点

Mark Taubert (Cardiff University School of Medicine, UK / ヨーロッパ緩和ケア学会 副理事長)

座長：高田 弘一 (札幌医科大学)

2026. 7. 11 Sat.

シンポジウム3
8:00-12:00

緩和ケアにおける患者と臨床医の出会いに対する精神力動的視点

座長： **Friedrich Stiefel** (University of Lausanne, Switzerland)

Sarah Dauchy (APHP, Centre University of Paris, France)

緩和ケアにおける患者と臨床医の出会いに対する精神力動的視点の現状
精神力動的心理学により形成される臨床医と患者間のコミュニケーションの違いを理解する

Friedrich Stiefel (University of Lausanne, Switzerland)

精神分析理論の基本的諸仮定とそれらの緩和ケアへの関連性
緩和ケアに適用される精神分析理論の臨床的視点

Sarah Dauchy (APHP, Centre University of Paris, France)

精神力動的アプローチが医学と緩和ケアにどのように貢献するか？
初期の精神分析からその後の医療分野への適用までの歴史的な道のり

James Levenson (Virginia Commonwealth University, USA)

精神療法的アプローチと緩和ケアはどのようにがん医療に統合され得るか？
精神分析的ケアと緩和ケアの統合がもたらす臨床的付加価値について

Camilla Zimmermann (University of Toronto, Canada)

「内側」からの視点：緩和ケアにおける精神腫瘍医としての働き方
精神力動的指向を持つ精神科医による患者と臨床家へのアプローチ

清水 研 (がん研究会有明病院)

ランチョンセミナー 2
12:00-13:00

比較文化学におけるスピリチュアリティ、スピリチュアル・ケア

Karen Steinhäuser (Duke University, USA)

座長：小西 達也 (武蔵野大学)

シンポジウム4
13:00-16:30

幫助死(安楽死、VAD、MAID)と緩和ケア：表裏一体か？

座 長： **Luc Deliens** (Vrije Universiteit Brussel & Ghent University, Belgium)
David Currow (University of Wollongong, Australia)

第1部 世界における幫助死の実践と経験

世界における幫助死法制と実践の進展

Luc Deliens (Vrije Universiteit Brussel & Ghent University, Belgium)

幫助死が長期にわたり合法とされている国々で得られた
緩和ケアと幫助死の関係に関する実証的エビデンス

James Downar (University of Ottawa, Canada)

ビクトリア州での合法化以来、オーストラリア各州において、
自発的幫助死に関する法律に緩和ケアの臨床医はどのように対応してきたか？

David Currow (University of Wollongong, Australia)

スイスの幫助死制度における緩和ケア医の経験

Claudia Gamondi (University of Lausanne, Switzerland)

第2部 映画上映

“The Last Flight Home”

監督: **Ondi Timoner**

1982年7月、イーライ・ティモナーは突然の脳卒中で左半身不随となり、53歳でエア・フロリダのCEOを辞任せざるを得なくなった。当時、彼は1日2マイルを走り、テニスをし、健康的な食生活を維持していたのだが、その後は、歩行が不安定なまま生涯を終えた。

イーライ・ティモナーは2021年1月、呼吸困難で入院。我々は、イーライ・ティモナーの最期の日々、素晴らしい功績、悲劇的な喪失、そして何よりも永続的な愛に満ちた比類なき人生を目の当たりにする。「The Last Flight Home」は、彼の最後の旅路を、彼の勇気ある家族が最後まで見守るといふ、感動的な社会体験を描いた作品である。

この映画は、米国ユタ州パークシティで開催された2022年サンダンス映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞した。

※この映画の予告編はYouTubeで見ることができる。Luc Deliensがアメリカの学会でこの映画全編をレビューしたところ、幫助死における緩和ケアの重要性と複雑さを示す非常によくできた作品であった。プロデューサーのMark Barger (New York city, USA) は、約1時間30分のドキュメンタリーを、日本語字幕を含めて45分に短縮することに同意した。

第5回 がん緩和ケアに関する国際会議

完全同時通訳

主 催 医療法人 東札幌病院 大会長 小船 雅義(札幌医科大学) 会 期 2026年7月10日(金)・11日(土)

会 場 札幌パークホテル 〒064-8589 札幌市中央区南10条西3丁目 TEL 011-511-3131 <https://park1964.com/access>

事務局 医療法人 東札幌病院 〒003-8585 北海道札幌市白石区東札幌3条3丁目7番35号 TEL 011-812-2311(代表) FAX 011-823-9552
E-mail: office@sapporoconference.com ホームページ: <https://www.sapporoconference.com>

「第5回がん緩和ケアに関する国際会議(SCPSC)」のSNSを立ち上げました

プログラムに関することや、開催時期の札幌市内の情報などを幅広く投稿する予定です。
是非、下記SNSを閲覧していただき、フォロー・イイね👍を宜しくお願いいたします！

SCPSC実行委員会 SNSチーム



アカウント名
SCPSC2026

外 来 医 師 ス ケ ジ ュ ー ル

★救急対応

(2025年12月1日～)

	診療時間		月	火	水	木	金	土
午 前	9:00～12:00	1診 (内科初診)	担当医	日下部	担当医	担当医	担当医	交代制★ (内科初診／再診)
		2診	石谷 (一般内科)	石谷 (一般内科)	石谷 (一般内科)	三原 (一般／腫瘍内科)	三原 (一般／腫瘍内科)	出張医 (内科初診／再診)
		3診 (消化器内科)	日下部	長岡	渡邊	伊藤	日下部	
		4診 (循環器内科)	高木	岡林	高木	秋津	秋津	
		5診	梅田 (呼吸器内科)		出張医 (呼吸器内科)	藤田 (一般／血液内科)	松永 (一般／血液内科)	
		6診 (一般外科)	信岡	信岡	石井	信岡	石井	交代制
		7診	久村 (心療内科)	★	前田 (乳腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)	照井 (一般／糖尿病内科)	
		8診(11:00～) (発熱者・必要時に対応)	担当医	担当医	担当医	担当医	担当医	
		歯科・ 歯科口腔外科	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	交代制

	診療時間		月	火	水	木	金	土
午 後	14:00～17:00	1診(13:30～) (内科初診／再診)	三谷	出張医	出張医	須釜★	三谷	
		2診	藤田 (一般／血液内科)	松永 (一般／血液内科)	町野★ (一般／緩和ケア内科)	町野 (一般／緩和ケア内科)	出張医 (一般／緩和ケア内科)	
		3診	佐賀★ (消化器内科)	伊藤★ (消化器内科)	渡邊 (消化器内科)	照井 (一般／糖尿病内科)	長岡★ (一般／消化器内科)	
		4診	秋津 (循環器内科)	偶数週 久野 (循環器内科)	照井 (一般／糖尿病内科)	高木 (循環器内科)	出張医 (脳神経内科)	
		5診		梅田 (呼吸器内科)	井須 (整形外科)	梅田 (呼吸器内科)	須釜 (一般／血液内科)	
		6診	石井・信岡 (一般外科)	久慈 (一般外科)	久慈★ (一般外科)	奇数週 宇野 (整形外科)	久慈 (一般外科)	
		7診	中村 (乳腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)	大村 (乳腺・甲状腺外科)			
		8診						
		内視鏡室				頭頸部外科出張医		
		歯科・ 歯科口腔外科	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	水越／太子 大内／石谷	

※8診午前は発熱者・必要時に対応(当日予約のみ) 月～金曜日11:00～

※6診午後の外科外来は、手術等により診療時間に変更となる場合があります。

※外来受付時間 午前の外来 月～土曜日 11:30まで 午後の外来 月～金曜日 16:30まで

※土曜日は交代制となっております。詳細はお問い合わせください。

※緊急対応等に備え、内科医師1名は13:30から待機いたします。

※当院では、待ち時間短縮のために予約制を導入しております。予約外診療も行っております。詳細は受付にお問い合わせください。

※病をよく識る外来(要予約)

※セカンドオピニオン外来(要予約)

※石谷外来 火曜日9:00～11:00

※放射線治療外来は、地下1階診察室です。

